

# 外国にルーツを持つ子どもたちの学習意欲と キャリア形成に関する研究

乾ゼミ (乾美紀 青山佳恋 井川真里 西川真由 橋本英司 堀越亮公)

## 1. 研究の背景と目的

現在、日本には外国にルーツを持つ子どもたちが増えている。彼らの多くは言語面、経済面、文化面などのハンディキャップを抱えており、将来、安定した仕事に就きにくい傾向がある。

姫路市には1979年から1996年まで定住促進センターというインドシナ難民を受け入れる施設があり、ラオスからの難民やベトナムからのボートピープル（ボートで海を渡ってきた難民）を受け入れていた。定住促進センターの閉所後も多くの人々が姫路市内に定住し、それに伴い国際結婚や呼び寄せ、研修生が増加したため、特にベトナムにルーツを持つ人々が2,400人以上住んでいる。

表1. 姫路市の外国籍別人口とその割合(2016)

順位	国	人数	割合
1	韓国	4,574	44.3%
2	ベトナム	2,423	23.5%
3	中国	1,406	13.6%
4	朝鮮	598	5.8%
5	フィリピン	431	4.2%
6	ブラジル	117	1.1%
	その他	766	7.4%
	合計	10,315	100%

出典 (姫路市 2017)

筆者らはこれまで、ゼミ活動の一環として姫路市内の小、中学校や城東町で毎週土曜日に行われる外国人の子どもの補習教室（以下、城東町補習教室<sup>1</sup>と記す）で、外国にルーツを持つ子どもたちに学習支援のボランティア活動を行ってきた。長期にわたる活動を通して、子どもたちが経済的、言語的なハンディを抱えながらも高校進学、さらに専門学校・大学への進学を望んでいることを知っていたが、現実的に、日本でキャリアを築いていくことは難しいのではないかという感想を持っていた。

そこで本研究では、外国にルーツを持つ子どもたちにとっての「学習意欲」や「キャリア形成」に焦点を当て、この2つが何によって影響をもたらされているかについて追究することを目的とする。

本研究で指す学習意欲とは種々の動機の中から学習への動機を選択してこれを目標とする能動的意志活動を起こさせるもの、と定義する。

## 2. 先行研究と本研究の関連

これまで、子どもの学習意欲やキャリア形成については、次のような研究がなされてきた。

まず、実際に姫路市に住むベトナム人を調査した関口・宮本 (2004) によれば、在住ベトナム人の子どもの学習意欲は日本人や韓国・朝鮮系の子どもと比べて低いと報告している。その理由については、学校での勉強が分からない、放課後に家庭や塾でそれを補う術もない結果としての「やむをえざる選択」という側面が大きいと述べている。

キャリア形成については、田中・小川 (1985)、鹿内 (2007) などに挙げられてきたように、親の職業は子の職業に継承されやすいことが定説となっている。

また盛満 (2011) は、子どもたちは自分が就くことのできる職業水準の上限を意識的・無意識的に感じ取り、学校で努力する意義を見いだせず、その結果として低い教育達成にとどまる、と報告している。

この他に、子どもの学力は親の年収に影響している (阿部 2010、荊谷 2012)、と教育社会学の分野で繰り返し述べられているように、キャリア形成は、家庭環境が深く関係している。

本研究では以上の先行研究およびこれまでの活動経験より、「外国にルーツを持つ子どもの学習意欲やキャリア形成は、親の影響が大きい」のではないかという仮説を立てた。特に、本研究では、関口・宮本 (2004) の調査から10年以上経った今、現状はどのように変化しているかを探るため、独自の調査を展開することとした。

## 3. 研究方法

研究方法はアンケート調査とインタビュー調査である。対象者と主な質問内容を以下に示す。

(1) アンケート調査 (2018年1月実施)

①姫路市立H中学校<sup>2</sup>の生徒 18名

②城東町補習教室に通う児童生徒 35名

合計 53名 (全て外国にルーツを持つ)

### 主な質問事項

- ・どのような時に学習意欲が高まるのか
- ・将来の夢は何か
- ・自分の勉強を支えている人は誰か



図1. 城東町補習教室の様子

(2) インタビュー調査 (2018年1、2月実施)

- ①城東町補習教室代表 (小学校教員)
- ②姫路市立H中学校教頭・教諭
- ③多文化共生サポーター<sup>3</sup>

インタビュー調査の主な質問

- ・子どもの学習意欲が高まるのはどのような時か
- ・勉強を支えてくれる人は誰か
- ・外国にルーツを持つ子どもの親の職業
- ・外国にルーツを持つ子どもの進路希望や職種希望

#### 4. 結果

(1) アンケート結果

##### ①学習意欲の高まりについて

子どもたちに学習意欲が高まるのはどのような時だろうか。アンケートの結果、図2に示す通り、自分の将来の夢のためと思った時が最も高いことが分かった(12件)。また友人と勉強している時(8件)や補習教室に行っている時(6件)、を選択している子どもが多いことから、近くに頑張っている人がいることや、勉強を教えてもらっている時に学習意欲が高まることも分かった。補習教室の存在は大きな励みである。

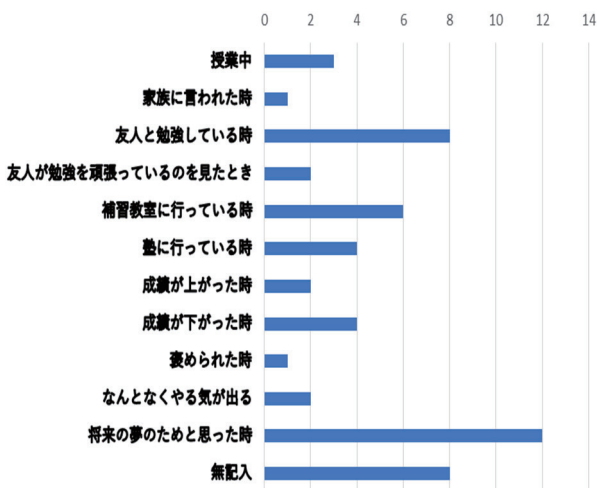


図2. 学習意欲が高まる時 (複数回答)

##### ②将来の夢について

上記に示した通り、子どもたちは、将来の夢のためと思った時にやる気が出ると答えているが、具体的にどのような夢を持っているだろうか。この質問の結果について、表2に合計を示す。

表2. 外国人の子どもたちの将来

順位	職業	人数	順位	職業	人数
1.	パティシエ	7	5.	漫画家	1
2.	芸能関係	4		美容師	
3.	ダンサー	3		ピアノの先生	
	サラリーマン			システムエンジニア	
	建築関係			ファッションデザイナー	
4.	警察	2	天文学者	未定	19
	保育士				
	スポーツ選手		合計	53	
	看護師				

以上のように、外国にルーツを持つ子どもたちの将来の夢は、日本人とさほど変わらない。

ただし、自由記述欄に夢を目指す理由について記述を求めたところ、サラリーマンを目指す生徒は「親の苦勞を見てきたから親に楽をさせたい」と記していた。また、外国人が就きがち「製造業の仕事は、いつ解雇されるか分からないのでしたくない。正社員になりたい。」と記す傾向もあった。また、看護師になりたいと答えた生徒は、その理由について、「国家資格なので永住権が取れるため」と述べていた。このように夢を目指す理由を聞くと、外国にルーツを持つ子ども独自の見解を得ることができた。

##### ③勉強を支えている人について

この質問については5つの項目に優先順位をつけ回答してもらった。以下の通りにポイントを振り分け、各項目の人に子どもたちが誰に支えられていると感じているかを読み取った。

- 1位の場合 5ポイント
- 2位の場合 4ポイント
- 3位の場合 3ポイント
- 4位の場合 2ポイント
- 5位の場合 1ポイント
- \*グラフ3縦軸の数値はこのポイントの合計とする
- \*グラフ縦軸の数値はこのポイントの合計とする

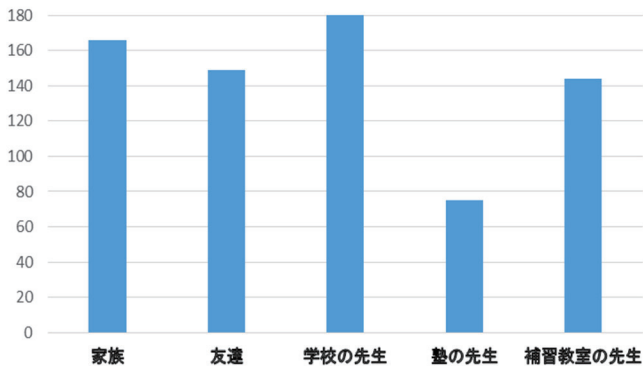


図3. 自分の勉強を支えている人（複数回答）

図3より、学校の先生が最も合計ポイントが高い（180）ことが分かった。子どもたちに勉強を教えている身近な存在だからこそ、支えてくれていると感じる子どもたちが多いのだろう。次に続くのは家族である（166）。また友達や補習教室の先生も重要な位置を占めていることが分かった。先の回答にもあったように、補習教室の存在の大きさもうかがうことができる。

塾の先生については塾に通っている子どもは優先順位を高くして回答していたが、家庭の事情から、塾に通っていない子どもが多く見られるため比較的低い結果となった。

## （2）インタビュー結果—子どもへの期待

調査対象は先述したように全て教育関係者であり、日頃から子どもたちに対して学習指導、進路へのアドバイス、通訳、など様々なサポートを行っている。

まず、本研究のテーマである学習意欲については、調査対象が共通して「親が苦勞しているのを見ているから、勉強していい職業に就きたいと思っている生徒が多い」と答えた。しかし、中学校教員によると、学習意欲があったとしても言葉や経済的な問題の壁がある。言語面でのハンディを持っている子どもたちはしばしば公立の高校に合格するだけの学力に到達できない。そのため、進学するなら学費が安い公立高校、それができなければ、私立は学費が払えないために就職せざるを得ないという結果になりがちである。

外国にルーツを持つ生徒は普段の生活で使用する言語（日常言語）が理解できていても、実際に勉強で使う学習言語は難しいため、教科書に書かれている文章、テストの問題文の理解に苦しむことが多い。中学校教員は、特に受験に必要な古典は日本の子どもよりも文化や言葉を理解することが難しいため、意欲があっても克服する壁は高いと感じていた。

次に、キャリア形成については、以下のように意見が分かれた。まず、城東町補習教室の代表は、就職するために高校は卒業しておいたほうが良いと答えた。

さらに看護師などの国家資格が取れる職業を子どもたちに勧めている。以前は、学校の先生を将来の夢とする子どもも多かったが、今は教員免許をとっても必ず採用試験に合格できてすぐに働くことができるとは限らないので懸念するようだ。そのため、もし仮に休職や転職をしてもすぐに働く場所があり、永住権取得にもつながる看護師の資格を取ったほうが良いと考えている。永住権があればローンも組むことができ車や家の購入ができるというメリットも伝えている。また、同代表は、周りに見本（モデル）がいることの必要性を以下のように説いた。

「子どもたちには、将来の夢が叶えられるという目に見えるモデルが必要です。子どもたちは親を反面教師にしていると言えます。」

このように述べ、親の境遇を認識しながら子どもたちが日本で生きていこうとする姿が浮き彫りになった。親をモデルとできないことは残念な事実であるが、ベトナム人の親は全員が製造業で働いており、子どもたちはそれ以外の職種を知ることがほとんどないという。補習教室の代表は、他にモデルを示し、職業選択の機会を与えることの必要性を説いた。

一方で、H 中学校の教員は、日本にいる外国にルーツを持つ子どもたちが生きていく上で必要な学力について、「運転免許を取ることができるための日本語力」と答えた。運転免許を取ることができる日本語能力とは免許を取る際に受けるペーパーテストの文章を理解し合格することができるまでの言語力である。運転免許を所持していれば就職時に役立つことが多いため、最低限これだけの言語力を身に付けてほしいという回答であった。

以上のように、キャリア形成や学習の到達レベルに関して意見は異なるが、これは教育現場と補習教室では教育者の立場が異なることから生じたギャップであろう。インタビューを通して、両者が持つ子どもたちへの将来への思いは共通していることを感じ取ることができた。



図2. H 中学校の正門（英語とベトナム語による表記）

### (3) インタビュー結果—親が抱える問題

これまでの調査結果によると、勉強（学習欲）を支えるてくれる人は学校の教員や家族であり、教育関係者もそれぞれの思いで子どもを支えていることが分かった。また、ほぼすべての親が自分と同じ苦勞を子どもにさせたくないという思いがあり、十分な教育を子どもに受けさせたいと考えていることも分かった。ただし、親には様々な事情があり、生活にも困難を伴っているという。

その原因は、以下のように整理できる。インタビューに協力してくれた多文化共生サポーターは、自身が難民の子どもとして来日し、現在は親となってコミュニティで教育に関わっていることから、より現実的な立場から親が抱える問題を聞くことができた。

#### ① 進路選択の難しさ

子どもの希望進路は高校進学、その後就職や大学進学となっている。なぜなら親が苦勞しているのを見ており、よりよい職に就くために教育を継続したいと考えているからである。親も自分と同じ苦勞はさせたくないという思いから子どもに進学させたいと考えている。しかし言語の面から親が教育制度や進路選択の複雑な仕組みを理解できていなかったり、経済的に進学が厳しかったりすると子どもは進学を諦め就職する場合もある。

#### ② 日本の教育制度の複雑さ

日本の教育制度を理解しきれない親も多く存在する。親の日本語が堪能ではない場合、学校の先生からの説明ですべて理解することは難しい。また、親子間のコミュニケーション不足や、初めから教育制度の理解をする気がない親もあり、そのことが教育システムの理解が進まない要因となっている。中学校側は対策として親の母国語に訳したプリントを配ったり、面談の際に通訳をつけたりするが、翻訳する過程で教育用語の意味やニュアンスまで細かく伝わっているかまでは判断しにくいのが現状である。進学制度については自分がよく分からないため子どもに任せている人もいる。子どもが私立高校に合格した後に公立高校より多くのお金を必要とすることを知り入学を反対された事例もある。

#### ③ 文化の違い

外国人の親、特にベトナム人の親は日本人よりも家族を非常に大切にしている傾向がある。日本では考えにくい、高校受験当日に親戚の葬儀を優先し受験を欠席させたり、兄弟の面倒を見させたり、家事を手伝わせるために学校に通わせないこともあることから、文化

の違いからも進学・就学の意欲が妨げられていることが分かった。

しかし、多文化共生サポーターは、親の繋がりや強さについて、以下のように答えた。

ベトナムコミュニティには教会がありますし、5年前に自分たちでお寺も建てました。ここで休日などに集まり、皆でコミュニケーションを図っています。

筆者らも、H 中学校の近くに位置する寺を見学したが、寺の境内に仏像があり、いつでもお参りができるようになっている。寺の建設に辺り寄付をした人の名前が壁全体に貼られており、週末にはベトナム人の僧侶（名古屋の大学に留学中）が寺に滞在し、コミュニティの相談に乗っていた。親たちもここに集まり、食事を共にするなど憩いの場所にもなっている。



図3. H 中学校近くにあるベトナム寺院

## 5. 考察

### (1) 調査から見えてきたこと

調査結果より子どものキャリア形成と学習意欲には親と教員の存在が大きく影響することが明らかになり、当初に立てた仮説の一部は支持された。そして、親自身に多様な問題や限界があるものの、コミュニティで助け合っている様子も明らかになった。

親の教育に対する価値観は子どものキャリア形成に強く影響する。ただし、調査を通じて分かったことは、日本語を理解していない親も多く、子どもが進学についての情報を伝えられないこともあり、子どもの学習や教育にブレーキをかけているという現状である。このため、子どもたちは、日本人の子どもと変わらない夢を持っているが、成長していく中で夢をあきらめてしまうこともあるのである。

このような現状の中、子どもたちの支えになっているのは教員と補習教室のスタッフである。両者とも子どもたちに勉強を教えることは変わらないが、支援の手厚さの部分では大きな違いが見られる。公立の中学

校では外国にルーツを持つ子どもたちやその親のために、通訳を付けたりはしているものの、個人に対してできるサポートには限界がある。一方で補習教室では、勉強面から進学、就職までの段階にわたって長期的にアドバイスや支援を行っていることも明らかになった。

## (2) 学力意欲向上とキャリア形成のための提案

以上の調査を振り返り、筆者らは外国にルーツを持つ子どもたちの学習意欲向上とキャリア形成のために以下二つを提言する。

1. 外国にルーツを持つ親たちのコミュニティでの教育システム・キャリア形成の講座開催
2. 外国にルーツを持つ子どもたちのキャリア教育の充実

まず、1について、調査した地区においては外国にルーツを持つ人々は信仰心が厚く彼らのお寺や教会を作りそこに集まることが分かった。彼らはそこで日常的な情報を共有しており、お寺や教会が親世代の大きなコミュニティの一つとなっている。このコミュニティを教育システム理解とキャリア教育の促進に役立てることができないだろうか。このコミュニティ内で教育について話し合う場を設ければより多くの人が教育システムについて理解することができる。これまで教育システムを理解しきれていなかった親もそれを理解している教育熱心な親に直接聞くことができる。こちらの方法のほうが通訳を介した説明よりも早く確実な情報を得ることができるはずである。

関口・宮本(2004)の調査から10年以上が経過した現在、補習教室のサポートが強まり、コミュニティの力も目立つようになった。このような状況変化は子どもたちの学習意欲の向上の助けになるため、今後、子どもたちが「やむを得ざる選択」をすることがなくなっていくことに期待したい。

2については、前述したようにベトナム人の子どもたちの親は全員が製造業であり、子どもたちは他の職業の種類を知らない。そのため親と同じ道を歩まざるをえない。補習教室代表の話にもあった通り、子どもたちには目に見える将来像の姿が必要である。それが自分たちと同じ外国にルーツを持つ人であるとなおさら影響があるであろう。これからそのような将来像を作るためにはキャリア教育の充実が必要不可欠である。将来の目標ができることは学習意欲の向上にも繋がり、学力が向上する要因になり得ると筆者らは考察している。

以上の提言が実現すれば、親が子どもたちのキャリア形成に与える影響と学習意欲は良い結果に変化する

と推測する。しかし、人材と資金が足りない学校やボランティアの活動では支援に限界があることも今回の研究で明確になった。各団体の単一支援では間に合わず、もっと円滑な連携が必要である。更には、豊富な人員と資金力のある行政が連携を強めることで長期的な支援が充実していくと考える。

謝辞

本調査は、国際ゾンタクラブのブランチである SEN 姫路ゾンタクラブの協力を得て実施された。SEN 姫路ゾンタクラブに心から感謝の意を捧げたい。

<sup>1</sup> 城東町補習教室は1999年10月に小学校教員の金川香雪教諭によって設立されたボランティアによる学習支援教室である。姫路市に住むインドシナ難民の2世、3世の子どもなどの外国人の子どもたちを対象に毎週土曜日の13時から15時の時間帯で開催している。

<sup>2</sup> 姫路市立H中学校は姫路市の北東に位置している。H地区は歴史的背景から皮革工場などの工場が多いため、近くの団地には多くのベトナム人が住んでいる。そのためH中学校には毎年数十人のベトナム人生徒が在籍している。

<sup>3</sup> 多文化共生サポーターとは日本語指導が必要な外国人児童生徒とのコミュニケーションの円滑化を図るとともに、児童生徒の学校生活への早期適応を促進する役割を担う兵庫県教育委員会非常勤嘱託員のことである。

## 参考文献

- 阿部彩(2010)「子どもの貧困—すべての子どもの幸せのために—」『経科研レポート』第36号, pp. 65-77, 日本大学経済学部経済科学研究所.
- 荻谷剛彦(2012)『学力と階層』朝日新聞出版社.
- 鹿内啓子(2007)「大学生の職業選択に対する職業意識と親の影響との関連性」『北星論集(文)』第44巻 第2号, pp. 1-11.
- 関口知子・宮本節子(2004)「姫路市小中学生の学習意欲格差：多文化教育のための予備研究」『姫路工業大学環境人間学部 研究報告』第6号 pp. 89-102.
- 田中宏二・小川一夫(1985)「職業選択に及ぼす親の職業的影響—小・中学校教師・大学教師・建築設計士について—」『教育心理学研究』第33巻 第2号 pp. 75-80.
- 姫路市観光交流局観光文化部文化国際課(2017)『姫路市国際化推進プラン』.
- 盛満弥生(2011)「学校における貧困の表れとその不可視化—生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に—」『教育社会学研究』第88集 pp. 273-294.